

肝心かなめの 肝臓 のはなし

24

香川大学医学部消化器・神経内科教授

正木 勉

進行肝細胞がんに対する最新治療 ～分子標的治療薬と免疫チェックポイント阻害剤～

私が大学を卒業した1990年頃、肝外転移をきたしたステージ4の肝細胞がん症例に対しては、効果的な治療がありませんでした。ところが、最近では、ステージ4の症例にも有効と思われる薬剤が登場しています。細胞の表面には、増殖に関連

するドアのようなものがあり、がん細胞は常にそのドアをたたいて、細胞が増殖するシグナルを活性化し続けています。ドアをたたいて細胞を増殖するには、増殖の経路に関与するタンパク質をリン酸化させる酵素（キナーゼ）が必要です。

この酵素を標的として阻害するのが、分子標的治療薬です。

現在、肝細胞がんにはソラフェニブ、レゴラフェニブ、レンバチニム、ラムシルマブという分子標的治療薬があります。特に出現しやすい手足症候群（手足に出る皮膚症状）などの副作用に注意しながら使用すれば、有効な薬剤です。

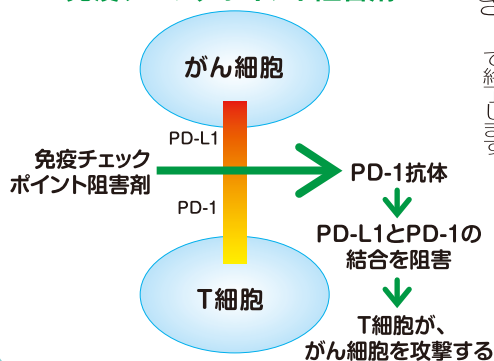
肝細胞がんでは 亡くならない時代へ

さらに近い将来、肝細胞がん免疫チェックポイント阻害剤が使われる時代が来ます。

免疫細胞であるT細胞は、体内に異物（ウイルス・細菌）が入ると細胞表面にPD-1という分子を表出し、異物を攻撃します。しかし、がん細胞はPD-L1という分子を出してPD-1とPD-L1を結合させ、攻撃されないようなシステムを作ります。その結合をPD-1抗体で阻害し、T細胞にがん細胞を攻撃させる薬剤を、免疫チェックポイント阻害剤といいます（図）。

肝細胞がんでも、分子標的治療薬と免

がん細胞に対する 免疫チェックポイント阻害剤



免疫チェックポイント阻害剤の組み合わせで命を落とさない時代が、そう遠くない将来に到来するだろうと思います。

最後になりましたが、読者の皆様、2年間で愛読いただきまして、本当にありがとうございました。

※「肝心かなめの肝臓のはなし」は今回で終了します。